



1 四面石塔と刻まれたハンゲル



大巖院の四面石塔

館山市の大巖院には珍しい四面石塔がある。玄武岩製、高さ約2.2m、四面には梵字(インド)篆字(中国)和風漢字(日本)、初期ハンゲル文字(朝鮮)の4種類の文字で「南無阿弥陀仏」と刻まれている。

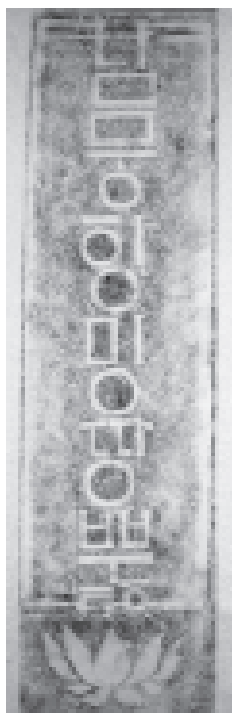
四面石塔には、その由来が記されている。これによれば、施主の山村茂平夫妻

が、生前に戒名を受けたお礼に石塔を寄進し、1624(元和10)年3月に建立(実際は、2月に寛文元年に改元)されたことが分かる。また、開祖である雄誉(雄誉霊巖)の名と花押が刻まれている。

また、石塔の字体は、大巖院や大巖寺(千葉市)などに伝わる雄誉の直筆などと一致し、石碑の製作に雄誉が深くかかわっていたことが分かる。

刻まれた4種類の文字の中で、特にハンゲル文字

の表記は現在とは異なった特殊なものである。ハンゲル文字とは、朝鮮王朝(李氏朝鮮)世宗のもと、15世紀中ごろの1446年に考案された朝鮮独自の表音文字で、あわせて漢字音の正確な表記法も作られた。石塔のハンゲル文字の表記は、15世紀中ごろの漢字音の表記法により、16世紀に復刻されたハンゲル訳経典と類似する初期のもので、四面石塔が建てられた1624年にはすでに本国では使用されなくなっていた。しかも、このような初期ハンゲルを刻んだ石塔は、韓国にも残っていない貴重なものである。



石塔のハンゲル

2 大巖院と雄誉

大巖院は、江戸初期の1603(慶長8)年、安房国主で館山城を築いた里見義康(1573~1603年)の寄進により、雄誉が開いた浄土宗の寺院である。

雄誉は房総地域を拠点に活動し、房総で創建や再興などにかかわった寺は、大巖院、大巖寺をはじめ15か所余りにのぼる。また、京都知恩院の住職もつとめ、徳川家康、秀忠、家光とも直接接触し、幕府の宗教政策に重要な役割を果たした優れた僧侶だった。

雄誉は、このような活動の中で、文禄・慶長の役で捕虜となり日本に連行された朝鮮人や、江戸初期に来日した朝鮮使節団と接触した可能性も指摘されているが、今のところ彼と四面石塔の初期ハンゲルを直接結びつける証拠は発見されていない。

3 江戸時代の日本と朝鮮の関係

戦国末期に全国統一を果たした豊臣秀吉は、明国征服の野望から、朝鮮国に30万の兵を派遣し、1592(文禄元)年から8年間にわたって文禄・慶長の役(韓国では壬辰・丁酉倭乱)を起こした。

結局、双方に大きな犠牲を出し、1598(慶長3)年、秀吉の死により撤退した。

その後、江戸幕府を開いた徳川家康にとって、朝鮮との国交回復は重要な外交課題であったが、家康の命を受けた対馬の宗氏が尽力し、両国の国交が回復した。これ以降、両国間で友好・親善を目的とした対等な外交関係が継続し、1607~1811年に計12回の使節団(通信使)が来日した。

しかし、四面石塔や房総と通信使を直接結びつける証拠はない。解明できていないことも多いのだが、初期ハンゲル文字を記した石塔が千葉県に存在しているのは事実である。今後の両国の交流に役立つ貴重な「遺産」であることは間違いない。

【参考文献】 千葉県日本韓国・朝鮮関係史研究会編著『千葉のなかの朝鮮』(明石書店 2001年)